

発表後の思いと反省

今回の全同教徳島大会（社会認識の分科会）においてこのような報告をさせてもらう機会に恵まれたことで、本校の教職員はじめ、ご指導いただきました運動団体の方々や多くの諸先生方にあらためて感謝申し上げたいと思います。

全同教大会には過去に何度となく参加させてもらい、感動を覚え、ともにいろいろなことを学ばせてもらいました。今回の報告では板中同和教育の取り組みのありのままを報告し、また、主事としての自分の思いのありのままを出し、多くの人たちからご意見をいただき学ぼうと思っていました。しかし、全同教大会の熱い雰囲気の中で、自分自身の力量不足から、日頃の「自然体」では報告できず、本校の教職員の熱い思いや実践を十分伝えきれなかったように思います。また、会場からの質問にもそれぞれの立場になって考え、的確に答えていけたかという点、時間的なこともありましたが、飾った言葉や思いになり、奈良県のお母さんをはじめ多くの方々と実践を通しての同和教育のあり方や本質に迫る討議が十分できなかったことを反省いたします。このようなことが同和教育担当、同和教育主事として、6年間本校の同和教育や学習会の運営に取り組んでいるつもりではいたものの、自分自身の怠慢や同和教育観の不十分さから、生徒や保護者に心配や精神的負担をかけてきたと思います。しかし、そのような自分の不十分な部分を多くの教職員が補ってくれました。教職員それぞれが自分の部落問題として全体学習や学習会の活動に積極的に取り組んでいく営みにより、今の板中の同和教育が一步一步確実に前進していることは確かだと思います。これまでの自分の思いや、板中の実践を自分なりに振り返ってみたいと思います。

全体学習が始まる5年前までの本校の同和教育は、被差別の立場にあり苦しい思いをしている、させられている生徒たちに対して、慎重に配慮するだけの教育であったように思います。学級での部落問題学習にしても、部落出身生徒の表情や意見を意識するあまり、どんな目標を持ち、授業をしているのかわからないようなこともありました。また、ある時は資料の読みとりで終始したり、発言のない状況の中で担任だけが一人しゃべったり、悲惨な差別の現実を話すことに終始したり、差別はしたらいかんとの言葉で締めくくる授業でもあった。そのような授業が部落問題学習を暗くし、さらに部落に生まれた生徒たちをつらくもしてきた。私もこのようなことに気づかず、学習を過去にしてきた一人でした。ある解放運動に取り組む人が、「差別の押し売りだけをしてくれるな。」と言われた言葉が今、身にしみてわかります。

その後、担任を離れて同和教育担当、主事となりましたが、学習会の制度のことや運営面のことを十分理解していなかったために、何をどう考え、どう行動したらよいかわからない自分でした。先輩主事のまねをして行動するが、課題が出て来るばかりで、何一つ解決できたようなことはなかったと思います。しかし、学習会の会場で生徒たちと取り組むことにより、また、保護者や解放運動に取り組む人たちと話しをする機会が増えるごとに、生徒や保護者の願い、部落解放への思いが徐々にではあるが、理解できるようにもなりました。

そのような自分の思いの中で全体学習がスタートしましたが、何よりも嬉しかったことは学習会の存在がどの学級の中にも、どの生徒の心の中にも位置づけられたことでした。それまで学習会のことは語られても、どこかに学習会は私たちと関係ないという考え方をしている生徒が多く、学習会参加の生徒が自分たちの思いを語りにくいという声をよく聞いたが、学級や全体学習の中で生き生きとこれまでの自分の思いを語っている姿を見ると、誇らしく思い、嬉しくなりました。

このように学習会と学級や学年、学校全体のつながりが持てたのは、生徒の頑張りもさることながら、多くの担任や教職員が学習会の部落問題学習に生徒を誘い、共に学習し、共に理解し、学級や全体学習へと広げた結果だと思います。

今、本校の同和教育は全体学習という学習形態により、大きく変わりました。それまでの閉鎖

的な同和教育から、すべての人の心を解放していく同和教育へと前進しています。そのことは、教職員が生徒に教える教育から生徒と共に学ぶ学習の大切さに気づいたことと、また、毎回全体学習に参加していただける解放運動に取り組む人たちや、保護者の熱い思いや支えがあつての結果だと思ひます。

これまで全体学習で学んだ多くの生徒が卒業していきました。時には高校の帰りに直接学習会の部落問題学習にも顔を見せてくれます。高校生の立場から意見を言ってくれたり、時には無言でじっと聞いているだけの時もありますが、1、2年前のこの卒業生が頑張っていた姿を思い出しながら、嬉しくなるし、今の生徒たちにもこのような部落解放の担い手となつてほしいと思うと、その姿が重なつて見えてきます。先日の分科会にも誰が連絡してくれたかはわかりませんが、勉強したいと大勢で元気な顔を見せてくれました。ただ残念だったのは、私たちの事前の配慮不足で午前中から参加していたにも関わらず、会場には入れず、そのことで論議をかもし出し、嫌な思いをさせたことでした。しかし、このように自主的に参加する意欲と情熱に頼もしく感じると共に、私ももっともっと頑張り、生徒と共に差別の解消に向かつて立ち向かえる教師にならなければと思ひました。

今、主事として何ができたかと問われると、十分な答えは見つかりません。多くの生徒が胸を張つて、高校や社会人として卒業していった時、あらためて主事として何ができたかを問い返していきたいと思います。

さらにこの同和教育を継続させていくためには、まず自分自身の心の中にあるさまざまな差別意識を払拭できるよう学習し、どのような場でも自分の心を素直に出せる「自然体」で話し合いができる自分になることだと思ひています。宜しくご指導をお願い致します。



「峠を越えて」販売（於 アスティとくしま）